

自分史のすすめ (下)

群馬県立女子大学

安保 博史

はじめに

今日は、「諸事の物に情あり」という芭蕉のことばをキーワードとして、人生行路を自分なりに再検証・再評価し、これからの人生の歩き方を模索したいと思います。

1、「諸事の物に情あり」―〈日常〉こそ感動の宝の山です―

山路きて何やらゆかしすみれ草

芭蕉

右は、近江への山越えの途次、芭蕉がふと目にした葦に無性に心ひかれて詠んだ句です。当時の文壇名士の湖春はこの句の「山路の葦」を難じ、

① すみれは山に詠まず、芭蕉翁俳諧に巧みなりといへども、歌学なきの過ちなり。

と叱りました。芭蕉は正式の歌学を学んでいないので、素人のようなミスを犯すのだ、ということです。伝統の歌学では、葦は、「野」に詠んでこそ葦の本意に合うのであり、そうわきまえて詠むのが常識なのです。その意味では、確かに芭蕉は「歌学なき」素人と言えるかもしれませんが、しかし、芭蕉は歌学に縛られない独自の目と耳と心を備えていました。

② 見るにあり、聞くにあり、作者感ずるや句となる。(三冊子)

という新しい考え方を持っていました。だからこそ、芭蕉は「今」「ここで」見とめた、名もなき「山路の葦」にひきつけられ、その「情」を素直に詠じ得たのでしょう。

「すみれは山に詠まず」といった伝統的固定観念にこだわらず、〈日常〉の卑近な題材に新しい感動を発見した芭蕉のしなやかな見方・感じ方は、〈退屈な日常〉に汲々とする現代人こそ見習いたいものです。

芭蕉は、晩年、江戸の門人杉山杉風えんすけに次のように言ったそうです。

③ 諸事の物に情あり。気を付けていたすべし。不断の所にむかしより云ひ残したる情山々あり。

そうです、「不断の所」〈日常〉こそが感動の宝の山なのです。

2、「山あり谷あり」の人生の再検証―現在の成熟した「目」と「耳」と「心」で捉え直してみる―

(1)「暗夜の一燈」としての芭蕉のことば

青春期、私は何度か絶望の淵に沈み、「何のための人生か」とうめき苦しんだことがあります。何を希望にして生きたらよいのか考えあぐね、途方に暮れる日々の中で、幸運にもこの「諸事の物に情あり」という芭蕉のことばに出会いました。暗夜の一燈とはこのことです。

「そうか―『感動』や『幸福』は自分が感受し、発見するものなんだ」と思うだけで、ぱっと目の前が明るく開けたようで、何だか元気が出たのです。ことばが人に「生きる糧」を与えることを初めて実感した、不思議な体験でした。

(2)「山あり谷あり」の人生の〈新しい発見〉

春の海ひねもすのたりのたりにかな

蕪村うすむら

人は誰でも、人生行路がいつまでも春の海のように穏やかにいってほしいと願うものですが、何事もままなら

ず、生きる力も衰えて波間を漂うことがあります。そんな日々は、昔ながらのモノ・カネ万能主義にまみれた優勝劣敗の人生観や価値観では、「思い出したくもない」まして「書き残したくもない」月日と思われてしまいがちです。

実際、私たちが人生が検証・評価する場合、陽の当たる「プラス」の部分になぞりがちです。そんな場合、家柄や学歴の誇示、仕事の手柄話、順風満帆（じゆんぷんまんぱん）の家庭生活などに次々と光をあて、失敗・敗北・過ち・不遇などには目もくれようとしません。

しかし、考えてもみてください。人生の道程を、自らの手で、世間の常識の手垢（てあか）にまみれた固定観念や尺度で「プラス」「マイナス」と評価し、人生の「山」の部分、「明」の部分にばかり光をあて、「谷」の部分、「暗」の部分は無価値なものとして切り捨て、闇に葬（くわ）ってもよいのでしょうか。

*

一回限りの掛け替えのない人生です。「諸事の物に情あり。氣を付けていたすべし」です。人生の禍福（わざ）にこだわらず、もう一度「山あり谷あり」の人生を、「自分の今現在の成熟した「目」と「耳」と「心」で捉え直してみませんか。

さっと山にも谷にも「何やらゆかし」（無性にいじらしく、心ひかれる）と思える新しい発見があるはずです。歩んできた人生行路の風景があちこちで輝き出し、見えてなかったものがいきいきと見え、聞こえてなかったものが聞こえてくるはず。そうした感動体験は、必ずや人生の再挑戦の「生きる糧」となっていくでしょう。

3、中坊公平氏の「金ではなく鉄として」を読む——人生の禍福——

中坊公平氏の「金ではなく鉄として」（岩波書店刊 平成十四年二月刊）という回想集をご存じでしょうか。この本は、『朝日新聞』に「金ではなく鉄として」と題されて平成十二年七月二十四日から翌年十二月三十一日までの一年半、毎週月曜日の朝刊家庭欄に連載された記事を一冊に纏めたものですが、類書にありがちな「自慢史」の臭みがなく、「人生の書」として一読三歎の妙があります。

「金ではなく鉄として」は、「森永」裁判、住専問題などで「正義」の旗頭として勇名を馳せた一弁護士の間形成の過程をつぶさに辿れ、「日本にもこんな人物がいるのだ。日本も捨てたものではない」といった安心感を与えてくれます。とりわけ巻末の「お別れに」と題された一文は洞察に富み、貴重です。

この物語を、森永と素ミルク中毒裁判の終結をもって閉じたいと存じます。中坊公平という人間の原型は、「森永」までで出来上がりました。この後、社会的に知られる事件を幾つか手がけることになりませんが、それらは私にとって、言わば応用問題でした。

多難な世ではありません。人生には寂しさの色も濃い。けれど「シューマイ弁当」の回でも申し上げましたように、苦しい時の中にあっても、幸せは身近な暮らしの中に、ときには日に何度も、私たちが訪れているわけではありませんか。さあ、新しく生まれてくる日々へ、ともに歩んでまいりましょう。

傍線部の「苦しい時の中にあっても、幸せは身近な暮らしの中に、ときには日に何度も、私たちが訪れている」ではありませんか」ということばには救われますね。

「苦しい時」、人は「自分ほど不幸な人間はいない」と思いつめ、どうかすると自暴自棄になったり、自ら死を選んだりすることさえあります。新世紀の初頭、リストラや生活苦による自殺者が急増している現代、今ほど「人生、捨てたもんじゃない」と思える一瞬を自ら作り出し、乾き荒んだ気分を潤いと明るさを与える生き方が求められている時はないでしょう。その意味で、中坊氏が「金ではなく鉄として」の「お別れに」に名を記した「シューマイ弁当」という文章は、人生の「底なしの淵」を前にして足のすくむ思いに沈む人々をも鼓舞する名文です。煩を厭わず全文を引用してみましよう。

何やかやで東京に出て来た私が、京都に帰るため新幹線に乗り込むのは、たいてい夜八時ごろ。お腹もすいているのだが、駅弁は止まって食べたらただの弁当だから発車まで我慢して、列車が滑り出すと、待ちかねたように好物のシューマイ弁当のフタをとり、ニンマリする。この瞬間、この世でこれくらい幸せはないって気分になっている。七百十円で安いなあ、うまいなあと、ほおが緩む。そりゃあ、「たん熊（たんくま）」はんとか、「なだ万」はんとか、さすが一流のお店は美味しおますなあ。けど、どっちが幸せかというたら私はシューマイ弁当や。そして家に着き、家内と並んで寝て、翌日の予定がハードでないなら、二人で壊れたレコードみたいに同じ昔話をして夜更かしし、そのうちお月さんが見えたりしたら、またしみじみ幸せなんやねえ。

*

① 私が住民側弁護団長としてかわった、香川県・豊島の産業廃棄物の撤去問題は、しんどい闘いだ。県は過ちを認めず、県民の理解もなかなか。そこで私たちは、豊島の実情を訴えて香川の五市三十八町すべてを行動する「百ヶ所運動」を計画した。

その日に集会を開く町で、まず「〇時に公民館においてください」とか車で流して回るのだが、当方七、八人に対して、集まりが十数人のことも多く、最悪二人だった。

運動に携わる島民たちに、何の日でもないのはもちろん、彼らは、それで産廃撤去の実現性が少しでも高まるならと、県への補償要求も放棄していた。

高齢の島民たちは、当時まだ運動が何ら先の展望を持たず、仮に成功しても、それから撤去までさらに十数年かかることを考えると、島が回復した姿を目にすることは難しかった。現に、公害調停を申請中の七年間だけで、五百四十九人の申請人のうち六十九人が亡くなった。それでも、子孫のためにと、弁護団長の私を信じて動いてくれた。

絶望も覚悟しつつ、精一杯の抵抗を島の歴史に刻みつけようとする島民の姿に、「自分は本当に、この人たちの願いを遂げてやれるのか」と、顔には出せないが、不安に締めつけられるような思いの連続だった。集まりがよくなかった、ある町での集会の後もそうだった。② 皆で帰るワゴン車の一番後ろの席に身を沈め、私は底なしの淵に引き込まれていくようだった。

そのとき、窓の外に目をやると、空は藍色を深めつつ、まだ黒々とはしておらず、田畑の広がる向こう、日が落ちた辺りにだけ掃いたように茜色が残っていた。見とれているうちに、すうっと、その光景の中に自分が溶け込んでしまった。

こうした瞬間、③ 私の体は幸福感に包まれ、自分が背負っているものすべてを、いったんパサーッと切っけ落とせる。④ 何も状況が変わるわけではないが、再びそこに立ち返ったとき、幸せの余韻を胸に、少し自分を取り戻して向き合うことができる。

*

⑤ 安い食いもんがウマイ、月が見えた。日が沈んだ……司法研修所で同期だった仲間に「ほかのことでは負けるとは思わんが、⑥ お前はほんまにアホみたいなこと、勝手に幸せになれるなあ」と、あきれられたことがある。置かれた状況にかかわらず、間欠泉が噴き上がるように突然、幸せになってしまうのだから。

私はこれを糧に生きてきた。リヤカーの家族連れを見送った父のつぶやきや、母が「山のあなた」を愛語していたことが私に気づかせたように、⑦ 幸せは、実は日に何度も人を訪れているのではないですかなあ。

中坊氏は、戦後数年ほど、傾いた実家の家族の(食)を担って、学業を放棄せざるを得ない生活を送り、具體的な道が見えてこないままに、「自分の将来に暗澹として」(『金ではなく鉄として』「山のあなた」)いました。そんな「苦い日々の秋の夕暮れ」、一日の農作業を終えて父と家路につく時、ある家族連れの光景―その日の収穫と子どもたちをリヤカーに乗せ、お父さんが引き、後ろからお母さんが押し、クワを担いだおじいさんが付き添っている―を見つめていた父が、突然、「公平、幸せっちゅうのは、こんなもんかもしれんな」とつぶやき、遠ざかるリヤカーを立ち尽くして見送ったのでした。中坊氏は、「粗野一方とばかり思っていた」父のそのことばやその姿が「ひどく意外」に思え、「『幸せはこんなもん』って、どういうことや」と思ったのでした。その晩、中坊氏が、「そうや、あれや」と思いついたのが、「私が幼いころから」母がしばしば口にしていた「山のあなた」(カール・ブッセ作、上田敏『海潮音』所収)という詩でした。

山のあなた

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ

噫、われひとと尋めゆきて、

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

母がなぜこの詩をいつも愛誦していたのか？ リヤカーの家族連れを見送る父がなぜ「幸せっちゅうのは、こんなもんかもしれんな」とつぶやいたのか？ この瞬間、両方の謎が合さり、両方合わさることで中坊氏は理

解できたのです。「幸せは彼方にあるのではなく、人が気づくことが気づくまいが、実は日々の暮らしたに、何げなく添うてあるのやないか。母も自分にそう言い聞かせていたんではないか」と……。中坊氏は「打たれたような驚き」と「種やかな安堵」の情を抱きます。現実は何も変わらず、展望を開く具体策を考えついたわけではないにもかかわらず、「幸せは身近なところに、それを感じられる人の胸の中に」という啓示を得て、「あたりの空気がうっすら明るさを帯びてきた」ような感慨を持つのです。そして、「エンドウがようやく実った、稲穂の波を立てて風が良い香りを運んでくる、畑に注ぐ陽が輝かしい」(「金ではなく鉄として」)「発熱」(「というように、」)「何気ない暮らしの中の幸せ」に気づくようになって、「きつい田畑の仕事に追われる私の気持ち」も和らぎ、「明るさを帯びてきた心」には、耕し、収穫する喜びが、素直にしみ通っていくのです。

中坊氏は、この「山のあなた」体験を経て、右に引いた「シューマイ弁当」からも窺える通り、「しんどい闘い」(傍線①)で「底なしの淵に引き込まれていく」(傍線②)のような状況に陥っても、「安い食いもんがウマい」、月が見えた。日が沈んだ」(傍線③)といった「ほんまにアホみたいなこと」で、勝手に幸せになれる」(傍線④)ことよって、「幸せの余韻を胸に、少し自分を取り戻し」(傍線④)で、再び過酷な状況に立ち向かうことが出来たのでした。

「幸せは、実は日に何度も人を訪れているのではないですかなあ」(傍線⑦)という結びは、何気ない物言いです。藤沢周平氏の「禍福」という小説の、

ひとは少しずつ幸運に恵まれたり、不運に見舞われたりすることを繰り返しているにすぎないのだろ。長い間、そのことが見えなかっただけだと思つた。

(藤沢周平氏の「禍福」)

という一節と通い合う、人生に対する洞察の深さを感じさせます。そうです、人はそれぞれ一生のうち少しずつ「幸運」と「不運」に見舞われ、一日のうちでも「幸せ」が何度か訪れているのです。しかし、それが見えず、それに気がつかず、「寂しく苦しい人生だった……」と絶望しつつ生を終えることになったら、死んでも死に切れません。

いかがですか。中坊氏や藤沢氏の箴言のような視点から、日々の暮らしを見つめ、「山あり谷あり」の人生の風景を振り返ると、思わぬ意味や感動、幸せや真実などを発見できそうです。そうすると「幸せの余韻を胸に、少し自分を取り戻して」これからの人生に再挑戦していく勇氣とやる気が湧いてきそうですね。

ところが、過去に紡いだ「自己物語」を再検証することなく、かえって、その物語を人生の真実としてそのまま定着させてしまうと、その人はますます過去の「自己物語」にがんじがらめになってしまい、身動きができません。それでは、人生を前向きに捉えて生きていくことができなくなるでしょう。

4、「山あり谷あり」の人生行路を元気に歩いていこう！

「諸事の物に情あり」(芭蕉)、「幸せは身近な暮らしの中に(ある)」「(中坊公平)」ということばは、人生を、日々の暮らしを、前向きにいきいきと生きていくための大切な見方・感じ方を教えてくれましたね。その見方・感じ方を駆使して、過去に紡いだ「自己物語」を検証し、新しい「自己物語」を築くことは、絶えず人生を前向きに捉えてアクティブに生きていくための「糧」となることをご理解願えましたね。

家族は、人生は、生きている限り、何があるかと、何度でもやり直せるのです。「山あり谷あり」の人生行路、「何やらゆかし」の精神を枯らさずに元気に歩いていきましょう。

(4 枚目)